

進化するふくいの 地域コミュニティ

今回の特集は、「地域コミュニティ」。地域のデジタル化を支援する新ツール「タウンデジボ」についてと、市内の自治会、自主防災組織、まちづくり組織などで、若い世代も取り込んで地域を盛り上げている興味深い活動を紹介します。



NEWS! 自治会で電子回覧板が使えます

福井市は、自治会向け電子回覧板アプリ「タウンデジボ」を導入しました。これまで、自治会が、人の手を通じて紙や冊子で配布回覧していた情報を、インターネットを通じて、スマートフォンなどに直接届けることができます。

自治会長の皆さん

- 会合の出欠などもスマホですぐに確認できる
- 自治会からのお知らせが配信できる
- 将来的に紙の仕分けや配布の負担が減る
- 自治会の費用負担はゼロ！

自治会のお知らせ



- ・町内のイベントのお知らせ
- ・会合の出欠確認
- ・訃報などの緊急連絡 など

自治会員の皆さん

- いつでもどこでも地域情報をスマホで確認できる
- 「回覧板、早く回さなきゃ」がなくなる
- 世帯内で複数人が利用できるのだから「家族全員に知らせないと」がなくなる



シンプルで見やすいデザイン



自治会内外の地域情報が
一か所に

ごみ収集日の確認も

自治会以外の情報は自動配信されます

【自動で配信されるもの】

「広報ふくい」「ふくい市議会だより」「上下水道のミカタ」「社協だより」公民館、児童館からのお知らせ など

福井市は、自治会の運営を支援しています。電子回覧板は、使い始めたら意外と簡単、便利。ぜひ一度試しに使ってみてください。

※当面の間、紙の配布回覧も継続します。タウンデジボについて、詳しくは、ホームページをご覧ください。



福井市長
西行茂



社
地

デジタルで進化する自治会

福井市生まれの タウンデジボ

タウンデジボは、福井市で生まれたアプリです。企画開発したのは(株)永和システムマネジメント（以下、「永和」）。永和には、社会課題の解決を目標とする「さきのこと」というユニークな部署があります。生活の中の身近な悩みを「ジャストアイデア」という企画の種にして、会社の外、市民や地域の人たちと実際にやりとりをしながらサービスを作り上げるという開発方法を採用しています。

「新しいシステム開発は、時間をか

けて準備しても、計画通りいくことは稀。たとえビジネスとして失敗に終わっても、社会に貢献できれば、という思いで、挑戦することを大事にしている」と語るのは、常務取締役の宮下さん。

タウンデジボは、自治会班長として配布回覧に携わった宮下さんの経験が元になり、実を結んだものです。

「『社会課題』というと、とても大きな問題に感じるが、実は身近で小さな悩みでもある。それなら、私たちのICT（情報通信技術）の力と、地域の人たちとの協力で、案外解決している」と話します。



永和システムマネジメント さきのこと

永和は、短期間でまず試行版をリリースし、使いながら修正を加えて完成へと近づけていく、スピード重視の開発を得意としています。この方法が、今回の自治会の課題解決には、うまく適合しました。



実証実験の情報共有会の様子（左） 地区説明会でタウンデジボの使い方をサポート（上）



社南地区は、他の地区も対象にした地域のデジタル活用に関する研修会なども行っている

地域活動を「見える化」 することが大事

昨年度、円山、社北、社南、和田の4地区で、タウンデジボのシステム開発に向けた実証実験が行われました。

永和は、説明会や意見交換会を開き、実際に使用した市民からの声にも、何度も耳を傾けました。「タウンデジボは、皆さんに育ててもらった」と言います。

「こちらの指摘をすぐに改善につなげてくれて、頼もしかった」と話すの

は、実証実験に参加した社南地区の自治会連合会の山本さんと佃さん。

社南地区は、実証実験以前から、自治会運営のデジタル化に精力的に取り組んできました。公式LINEと見やすいホームページを設置し、心がけたのは、地域活動の報告を発信するようにしたことです。

「地域は、自治会役員をはじめ、多くの人たちによって陰ながら支えられている。これまでは、外からは何をしているのか見えにくかった」

そのことが、地域への関心の希薄さや、役員を引き受けることの抵抗感につながっていたと言います。

また、地元の至民中学校とまちづくり委員会のワークショップでは、子どもたちからも、地域の情報をもっと知りたいという意見が寄せられました。

現在は公式LINEからタウンデジボに移行。情報発信をするようになってから、地域のイベントへの新たな参加者が増え、好意的な問い合わせも増えたそうです。

「地域のデジタル化のこつは、全て

をデジタル化しようと、苦手な人や高齢者に無理強いしないこと」

永和の試算によれば、福井市全体で紙の文書配布にかかる時間は、年間で2万時間超とも。たとえその半分でも節約できれば、相当な省力化につながります。

「浮いた分の時間を少し使って、デジタルが苦手なお年寄りに声をかけてあげれば、きっと喜ばれるし、地域全体もよくなる」と、デジタル格差との向き合い方についても教えてくれました。



至民中学校の生徒たちとのワークショップ

南区



社南地区自治会連合会

ゲームで進化する地域防災

松本地区



松本版 HUG ゲームのカード



平面図の上にカードを配置して避難所運営を体験



松本地区自主防災組織連絡協議会とクリエイティブプロジェクトのメンバーたち

防災をテーマに、地域コミュニティに若い世代を呼び込もうとする活動があります。

松本地区の自主防災組織連絡協議会は、令和7年度、高校・大学生たちと協働で、防災を楽しく学ぶカードゲームづくりに取り組みました。これは、福井市と若者が連携協力して、まちづくりや地域課題解決、魅力発信などを行う「クリエイティブプロジェクト」の一環です。

静岡県で生まれた避難所運営ゲーム「HUG」を基に、福井市松本地区仕様に内容やデザインをアレンジ。静岡版にはなかった採点基準とスコ

アシートを加えることで、ゲーム性を高めました。

完成後、地元の北陸高校の生徒たちを招いて行った体験会は、期待以上にゲームが白熱し、大盛り上がりを見せました。

若者たちは、普段は考えたこともなかった、災害時の避難所の運営の方法や、必要な物資や道具がどこにどのように保管されているかなどを学びました。また、公民館を拠点とする地域コミュニティの活動について知り、以前よりも身近に感じるようになったと話します。

松本公民館では、松本版 HUG

ゲームを使って、今後は、地区の中学・高校生や青年層へ参加者を広げ、さらに地域の活性化を図ろうとしています。



北陸高校の生徒たちが参加した体験会の様子

かたいけの（春山地区地域コミュニティ盛り上げ隊）と春山地区の皆さん

春山地区

スポーツ観戦で進化する公民館



※福井市、北陸コカ・コーラボトリング、福井ブローウィングスの「ふくい地域PV推進プロジェクト」を活用しています。

今年2月、春山地区地域コミュニティ盛り上げ隊「かたいけの」は、春山公民館で福井ブローウィングスのパブリックビューイングを初開催しました。当日は大雪の天候にもかかわらず、小学生から60歳代までの地区住民が会場に集い、元気な声援を響かせました。

きっかけは、昨年春山公民館で行われた「子ども食堂」。ボランティアとして参加した代表の清水さんが、地域コミュニティの担い手不足とい

う課題を知り、公民館に幅広い年代の市民を呼び込むパブリックビューイングを提案しました。

受付を開始すると予約はすぐに埋まり、公民館は福井ブローウィングスのパワーに驚いたと言います。

清水さんは、バスケットボールを通じた地域づくりという福井ブローウィングスの考え方に共鳴する熱心なファン。スポーツ観戦だけでなく、地区を盛り上げるさまざまな分野にも活動を広げていきたいと話します。

社会実験で進化する地元駅



令和7年11月のモリスタのイベントの様子

森田地区

森田地区のまちづくり組織「森田地区文化委員会」は、ハピラインふくい森田駅を中心に、駅活用社会実験プロジェクト「MoRe:Sta.」（モリスタ）を展開しています。

森田地区では、近年の人口増加を受け、あらためて地域の人と人のつながりを重要視しており、駅を拠点にした新たなコミュニティづくりを目標にしています。

令和4年に開催した駅利活用のためのワークショップには、小学生から高齢者までの地区住民が参加。さまざまなアイデアや意見が出され、その中から「まずはできることからやってみよう」とモリスタを始めました。



モリスタに参加する仁愛女子短期大学の学生たち



森田地区文化委員会

駅を会場にした年一回のメインイベントには、地区内にキャンパスがある仁愛女子短期大学の学生たちも参加。また、地域で店を出したい人を募り、駅敷地の一角を提供する試みチャレンジショップ「えきなかまーけっと」も好評です。

森田地区には、今年4月、新たに九頭竜中学校が開校します。地区の人たちは、これをよい機会と捉え、同じ校区となる河合地区とも連携しながら、新しいイベントなどを企画していきたいと話しているそうです。

進化する地域コミュニティ 共通項は「楽しい」！



町内会・自治会サポートセンター
水上裕太さん

自治会などの地域コミュニティ運営の相談に乗り、サポートする、全国的にも珍しい活動を行う市民団体「町内会・自治会サポートセンター」。代表の水上裕太さんに話を聞きました。

「地域の未来というと、地域課題をどうするか、負担をどう分け合うか、など暗い話になりがち。でも、発想を転換して、地域に楽しいことをどんどん増やしていくことを目指す方がきっとうまくいきます。地区のお祭りでも、イベントでも、自分たちで自分たちのまちのことを決めて、やりたいことを実現していく体験は、本来とても楽しいことです。楽しいことがあれば、自然と人は集まってきます！」

4月 開校

九頭竜中学校



駅舎内に森田地区の人たちが作品を展示できるギャラリーを設置

今回の特集では、ICTを使ったり、若い世代が積極的に関わってチャレンジをしたり、地域コミュニティの古いイメージを覆すような事例を紹介しました。皆さんが住む地区にも、新しいこと、楽しいことをやっているコミュニティがきっとあります。4月はちょっと新しいことを始めたい季節。今年度は、地域コミュニティに積極的に関わってみませんか。

問合せ 広報プロモーション課 TEL 20-5257 FAX 20-5438